

表象文化の翻訳

—「蓮如上人舊跡絵図」を読み解く—

Translation of Culture and Representation: A Tentative Interpretation of Images Realized in a Scroll of Ven. Ren'yo's Great Achievements

英米学科
大森裕實

緒言

新設された「通訳翻訳研究所」(2016.4.1 設立)は本年度 5 月から本格的に活動を開始し、研究所を構成する三部門「通訳研究・実践部門」「翻訳研究・実践部門」「支援テクノロジー研究部門」がそれぞれに特化した事業を実施することになった。そうした研究所活動を知った Thomas Cox 氏(本学非常勤講師)から、一枚の絵図(「越前吉崎蓮如上人舊跡」大聖寺北陸印刷印行[複写版])が研究所に持ち込まれ、そこに収載された 12 枚の絵図について、その要点をイメージできる英語翻訳を依頼されたことに、本稿執筆の動機があることをあらかじめ記しておきたい。

本稿が表題として掲げた「表象文化」とは、一般に「表象」(representation)として現われる文化事象のことを意味し、その「表象」という語は、人間が世界をイメージし、その行為を通じて表現されたものを指す——代表的な例としては、視覚に表現される絵画や写真、視覚のほか聴覚や時間の感覚にも関わる映画、触覚や立体的な空間認識に関わる彫刻、文字という別の媒体を通してイメージに接続する文学(文字表現)、内部に入り込むことで全ての感覚に関わる建築など、人間の創り出す様々なものが関わっているとされる(Wikipedia 参照)。

而して、本稿の究極の目的は、「表象文化」の一例としての「越前吉崎蓮如上人舊跡」絵図を読み解く過程(Case Study)から、異文化間の翻訳にとって何が要諦なのかについて考究することにあるが、当該絵図読解内容にも資料的価値があると判断して、等しく重点が置かれていることを強調しておかねばならない。

I 日英語における「数」の概念——コンテキストの再構築と翻訳の多様性

日本語話者と英語話者とは、「数」に対する言語化が異なることはしばしば指摘される場所である。これは文法的範疇(grammatical category)として名詞の単数・複数が日本語の場合に顕在化しないというばかりではなく、概念的範疇(notional category)としても、名詞の表わす数量的イメージが具体的ではないのではないかと思われる。言語が思考に大きな影響を及ぼすという点において、これはサピア・ウォーフの仮説(「言語相対論(Linguistic Relativity)」及び「言語決定論(Linguistic Determinism)」)の好例であろう。

こうしたことが顕著に現われる事例として、次の芭蕉(松尾芭蕉 [1644-94])の有名な俳句と、その英訳をあげることができよう。

「閑さや 岩にしみ入る 蟬の声」(現山形県立正寺にて)

さて、この場合の「蟬」ははたして 1 匹であろうか、それとも群がっている多数であろうか——たった 1 匹の蟬の琴線のように張りつめた啼声が岩にしみ入るほどの静寂さを詠んだ俳句とも解釈できる一方で、多数の群生した蟬が発する莫大な啼声が岩をも砕く勢いとして感じられる静と動の対比を詠んだ俳句とも解釈できる。日本語母語話者の間でアンケート調査をしてみても、意見は分かれる。事実、この二通りの解釈は英訳俳句においても反映される。

Deep silence, the shrill of cicadas, seeps into rocks.

Stillness penetrating the rocks, the voice of a cicada.

Amidst the chirring of cicadas, quietness seeps into the rocks.

こうしてみると、日本語話者にとっては名詞(事物)の「数」はあまり重要な問題ではなく、それが英語学習者を悩ませたり、英語話者を驚かせたりする一大要因となっている。つまり、名詞が「有界性」をもつかどうか英語話者が言語化された内容をイメージする際に極めて重要だが、それが日本語話者には十分把握できず、次のような英文を産出し、失笑を買ってしまうことがある。

I'd like to eat a chicken at dinner. (⇒ I'd like to eat chicken at dinner.が普通)

(鶏一羽を丸ごと??)

さらに、映画に目を転じてみると、『幸せの黄色いハンカチ』(山田洋次監督 1977 年公開; 1971 年に『ニューヨーク・ポスト』紙に掲載されたピート・ハミルのコラム『Going Home』をベースに、北海道を舞台に撮影された日本のロードムービーの代表作)をあげることができる。刑期を終えて網走刑務所を出所した元炭鉱夫の島勇作(高倉健)は、「妻の光枝(倍賞千恵子)がまだ一人暮らしで俺を待っていてくれるなら・・・鯉のぼりの竿に黄色いハンカチをぶら下げておいてくれ。それが目印だ。もしそれが下がってなかったら、俺はそのまま引き返して、二度と夕張には現われない」という約束を確認すべく、途中何かと逡巡しながらも、夕張の家に行き着くと、そこには黄色いハンカチがはためくというハッピーエンドのストーリーだが、そこで観客を感動させるものは黄色いハンカチの「数」に関する裏切りにあり、監督の意匠はそこに凝縮されているといえる。私たちは一枚のハンカチが竿にぶら下がっている映像を予期するのだが、実際は、何十枚というハンカチが風にはためく姿を目にするのである。

この邦画はハリウッドで 2008 年にリメイクされて、英題名は *The Yellow Handkerchief* となっており、A Happy Yellow Handkerchief あるいは *The Yellow Handkerchiefs* とも訳せそうだが、それだと英語では事前にネタバレしてしまうであろう。



上掲の事例から明らかなように、異なる文化において当該の表象を理解するためには、言語化あるいは映像化されたテキスト(Text)を産み出すコンテキスト(Context)を再構築する想像力が厳然として求められている。

それに関連して、「翻訳」を一般的な外国語(英語)教育に応用する実践的観点から附言すると、英語学習において「文法」が難しいと感じる学習者が少なくない理由の一つに、当該英文が

産出されるコンテキストを再構築する困難さがあるのではないかと考えられる。すなわち、文法規則の習得そのものが難しいというよりも、そのルールに則して産み出された英文の意味を理解することが難しいのではないか。あるいは、テキストの背後にあるコンテキストを想像する力を涵養するトレーニングが不十分なのではないか。従来から、日本の英語教育で採用されてきた「文法訳読方式」(Grammar-Translation Method)が、コンテキスト再構築の実践を含み、通訳及び翻訳の思考過程及び実践を要求する教授法であったことは、表層的なコミュニケーション能力重視の現在にあって、なお十分に評価に値することをここで強調しておきたい。

II 翻訳実践研究——「越前吉崎蓮如上人舊跡」絵図(大聖寺北陸印刷印行)を読み解く

ここでは、Cox 講師より依頼のあった「越前吉崎蓮如上人舊跡」について、そこに収載された12枚の絵図に関して、その要点をイメージできるコンパクトな英語翻訳を試みる。今回の翻訳にとって不可欠のコンテキスト再構築には特定分野の専門性の高さが要求されるため、安藤弥^(ツカ)氏(同朋大学文学部仏教学科准教授/同仏教文化研究所所属)の協力を得た。以下の12枚の絵図の解説と註記は、特段の別記がない限り、安藤氏が記載したものに拠る。ここに特記して、謝意を表す。

「越前吉崎蓮如上人舊跡」絵図¹⁾



(大聖寺北陸印刷印行)

1.「蓮如上人、鹿ニ連レラレテ吉崎ニ参リ給フ
図」

The Venerable Ren'yo goes to Yoshizaki accompanied by a deer, which is a sacred messenger of Kashima-Myojin.

※内容詳細は次の絵図を参照のこと。



2.「鹿島明神、開山上人ノ遺言ヲ蓮如上人へ
申傳ヘラルハ図」

According to Shin'ran's will, Kashima-Myojin advises the Venerable Ren'yo to found a temple at the mountain in Yoshizaki.



本願寺蓮如(1415-1499)が文明3年(1471)、北陸に下向する。越前細呂木郷(現福井県あわら市)を通りかかると一頭の鹿が現われ、蓮如を吉崎山頂へと案内する。この鹿は実は鹿島明神(現茨城県鹿嶋市・鹿島神宮)の遣いで、かつて親鸞(1173-1262)が関東の稲田御坊(現茨城県笠間市)で布教していた際、鹿島明神が帰依し、法名を真海(信海)と名付けられたという。その真海(鹿島明神)が親鸞の遺命で真宗再興のため堂舎建立を念願する蓮如を風景優れ、仏法有縁の地である吉崎へといざなつたという言い伝えを表わす²⁾。

3.「文明六年三月十三日晚、老婆後泳して火
附に行く図」

On the 13th of March in 1474 there appears an old woman swimming on her back in the river with a torch to set fire.



文明6年(1474)3月13日晚、吉崎御坊において、真宗の教えを説き、多くの門徒の帰依をうける蓮如を恨み憎んだ老婆(吉崎浦の対岸の浜坂浦に住む真宗高田派の門徒という)が、そそのかされて、浦を背泳ぎしながら渡り、吉崎御坊に火を付けに行ったという言伝えを表わす³⁾。

4.「漁師喜八、娘ト共ニ白米一升ヲ持チテ参詣ノ図」

Together with his daughter, Kihachi, a fisherman, carries a bundle of rice, in order to visit Ren'yo's temple in Yoshizaki.

※内容詳細は次の絵図を参照のこと。



5.「喜八ニ獵漁ノ御文ヲ授ケ給フ図」

Kihachi receives a warrant of fishery and hunting from Ren'yo.



越前三国の漁師喜八が娘とともに白米一升を持参して吉崎に参詣し、蓮如の教化を受けるといふ伝説。喜八の娘は、殺生を行なう漁師を生業とする父の所業を嘆き、ともに蓮如の教化を受けようと父を諭し、吉崎へ参詣。そこで喜八は蓮如から獵(りょう)・漁(すなどり)の御文(文明 3 年 12 月 18 日付)を授かり、救われていくといふ説話を表わす⁴⁾。

6.「嫁おどしノ図」(「はまばはめ喰わばくらへ今生の 他力の信をよもやはむまじ」)

Daughter-in-law intimidated by Disguised Mother: 'You can eat me away if you want to do that, but you can't take away my belief and dignity'.

※内容詳細は次の絵図を参照のこと。



7.「婆懺悔ノ図」

The old woman, that disguised Mother, repents herself, which has an effect to make an attached mask of devil removed from her face.



十楽村与曾次の妻お清は熱心な真宗門徒で、毎晩、一里半離れた吉崎御坊まで蓮如の説法を聞きに出かけていた。これを快く思わない念仏嫌いで嫉妬深い姑(婆)が、嫁の吉崎参詣をやめさせようと、ある晩、白山神社の鬼の面をつけ、鎌を手にして、山道でお清に襲いかかった。しかし、お清は念仏しながら歌(「はまばはめ・・・」)を詠み、帰宅した。姑がいないことを不審に思ったお清が山道に戻ると、鬼の面が取れず苦しむ姑の姿があり、そこで二人して蓮如のもとに行き、姑(婆)が深く懺悔したところ、姑の顔から取れなかった鬼の面がはずれ、その後は二人でよく蓮如の説法を聞いたという説話を表わす⁵⁾。

8.「見玉公、不思議ヲ顯ハシ菩薩ノ姿ニテ天上シ給フ図」

The Nun Kengyoku ascends to Heaven, doing miracles as a figure of Buddhist saint, *Bodhisattva*.



蓮如の次女見玉尼は、幼少のころ喝食(かつじき[寺に使える小童])に出され、やがて蓮如の叔母見秀尼の弟子となって浄土宗清浄華院に入り、後に吉崎の蓮如のもとに赴き、よくその教化を受けた。しかし、文明2年(1470)頃から相次いだ肉親の死(蓮如の妻蓮祐尼、五女妙意、長女如慶、八女了忍)に痛嘆した見玉尼は、文明4年(1472)に自身も床に伏し、94日目(8月14日)についに亡くなってしまふ。その見玉尼が、臨終の際に、不思議なことを顯しながら、菩薩の姿となって往生したという伝説を表わす⁶⁾。

9.「本光坊火中投身ノ図」

Honkobo throws himself into the fire to save a valuable scroll of Shin'ran's preach-ments.



※内容詳細は次の絵図を参照のこと。

10.「本光坊ノ黒焼」

Charred body of Honkobo, who keeps the scroll in his belly from the fire.



文明6年(1474)3月28日に多屋からの出火で炎上した吉崎坊舎から避難した蓮如が、建物の中に親鸞真筆の『教行信証』証巻を置いてきてしまったことに気付く。一同が悲嘆にくれる中で本光坊了頭が取りに行くといい、一同の制止を振り切って燃えさかる火の中に入って行き、戻っては来なかった。鎮火後、焼け跡を探すと、瓦礫の中に黒焦げでうつ伏せに倒れている本光坊の遺体がある。起こしてみると、腹が割かれ、そこに『教行信証』証巻が収められ、焼失を免れていた。本光坊が命を懸けて聖教を守った姿に、蓮如をはじめ一同、涙したという伝説を表わす⁷⁾。

11.「正須坊宅デ別レノ南無ノ六字名号渡図」
Ren'yo bequeaths the six characters, Na-Mu-A-Mi-Da-Butsu, taught by Master Shin'ran, as a departing gift for the house of Shozubo.



文明 6 年(1474)に勃発してしまった加賀一向一揆に苦悩した蓮如は、吉崎を離れる気持ちを持ち始める。それを悲しむ人びとに対して、正須坊宅において、別れの形見として「南無阿彌陀仏」の六字名号をしたためた伝説を表わす⁸⁾。

12.「文明七年九月四日、上人船ニテ若狭小濱へ逃レ給フ図」
On the 4th of September in 1475 the Venerable Ren'yo escapes to Obama in the Wakasa District by boat.



文明 6 年(1474)の一向一揆勃発以来、不穏な状況が増していくことに苦悩した蓮如は、文明 7 年(1475)8 月ついに吉崎退去を決意し、船に乗って海に出て、若狭国小浜(現福井県小浜市)に逃れる。ここに文明 3 年(1471)からおおよそ 5 年に亘った蓮如の吉崎時代が終わることを表わす⁹⁾。

結言

本稿では、翻訳実践の資料として、「越前吉崎蓮如上人舊跡」(大聖寺北陸印刷印行[複写版])収載の12枚の絵図英語翻訳を試みた。その過程において、絵図のコンテキストに関する専門的調査の重要性に鑑み、同朋大学仏教文化研究所の協力を得た。その結果、それぞれの絵図の十分な理解に基づいて、コンパクトな英語翻訳が可能になった。逆説的には、コンパクトな英語翻訳文の中に、膨大な背景的知识(百科事典的知識)が埋め込まれていると表現してもよい。およそ「翻訳」とはそうした実体(realité)であろう。

また、今回の絵図の翻訳は、大きな枠組みでとらえ直せば、「表象文化」の翻訳の一例を示したことになる。その一環として、映像文化(映画字幕)翻訳も興味深いトピックではあるが、紙幅の関係上、それについては回を改めて考究する。

註

※これらの註記は安藤弥(同朋大学准教授)解説に基づく。

1)「越前吉崎蓮如上人舊跡」絵図の配置

④「漁師喜八、娘ト共ニ白米一升ヲ持チテ参詣ノ図」	③「文明六年三月十三日晚、老婆後泳して火附に行く図」	②「鹿島明神、開山上人ノ遺言ヲ蓮如上人へ申傳へラルヘ図」	①「蓮如上人、鹿ニ連レラレテ吉崎ニ参リ給フ図」
⑧「見玉公、不思議ヲ顯ハシ菩薩ノ姿ニテ天上シ給フ図」	⑦「婆懺悔ノ図」	⑥「嫁おどしノ図」	⑤「喜八ニ獵漁ノ御文ヲ授ケ給フ図」
⑫「文明七年九月四日、上人船ニテ若狭小濱へ逃レ給フ図」	⑪「正須坊宅デ別レ南無ノ六字名号渡図」	⑩「本光坊ノ黒焼」	⑨「本光坊火中投身ノ図」

2)この絵図は、江戸時代後期からある基本的な蓮如吉崎伝説を表わす。鹿島信仰が北陸にも広がったことが背景かと思われる。鹿島真海については、親鸞の直弟として実際には鹿島の信海が存在(鹿島門徒は南北朝時代ころに初期本願寺を支えた重要な存在)。蓮如は長禄元年(1457)本願寺を継職し、精力的な布教活動を行なう。蓮如の動きを警戒した比叡山延暦寺が寛正6年(1465)大谷本願寺を破却。応仁元年(1467)に和解後、隠居した蓮如は大乗院経覚らの勧めもあり北陸へ下向。拠点を探して吉崎を見出す。

3)これは江戸時代後期の諸縁起史料には見当たらず、近代になってから地元で発生・派生したストーリーとみられる。この際に、火を消そうと、人間のみならず、何千何万というカニが泡を出して火を消そうとしたという伝説が附加されて語られることもある——火消ガニ伝説。この他、片葉の葦など「七不思議」といわれる伝説も語られるようになる。なお、史実において吉崎御坊が炎上したのは同年同月28日、吉崎御坊の南大門附近の多屋より出火して堂舎が焼失した(→「腹籠りの聖教」伝説)。

4)これも地元で発生した伝説で、いくつかのパターンがある。その一つでは漁師喜助・喜八の救済譚として語られ、喜八の娘は父の所業を嘆き、辞世の歌を読んで川に身を投げてしまったという。あるいは焼失した吉崎御坊の再建のために奉公に出て、その前借金を蓮如に寄進した娘のけなげさに喜八も心を改め、ともに蓮如の教えを聞くようになったというパターンもある——いずれも背景に悪人往

生・女人往生思想がある。

5) 蓮如吉崎伝説の中でもっとも有名な「嫁威肉附面」伝説。語り口には実にさまざまなパターンがあるが、基本的に、念仏を信じる嫁の吉崎参詣を、鬼の面をかぶって脅かし妨害しようとする姑が鬼の面が取れなくなり、蓮如の教えを聞いて懺悔し、鬼の面が取れるという流れである。真宗における女人救済譚の典型的説話の一つ——その他に大蛇済度譚などがある。この「嫁威肉附面」は、真宗大谷派吉崎別院(東)、浄土真宗本願寺派吉崎別院(西)、願慶寺(大谷派)、吉崎寺(本願寺派)などに伝えられ、願慶寺や吉崎寺では現在でも参詣者に説かれている。

6) 「見玉尼の往生」としてよく知られる説話。蓮如の御文(帖外・文明4年8月22日付)に確かに記されている。見玉尼が顕した不思議とは、その「見玉尼往生」の御文によれば、蓮如や多くの人が悲嘆にくれる中で、ある人が不思議な夢を見る。白骨の中より三本の蓮華が出て、その花の中から小さな金色の仏像が光を放って現れ、しばらくして蝶になり、飛んで行ったところで夢から醒めた。見玉尼往生に導かれ、いよいよ信心を深めるべきと蓮如が説くというものである。現在の吉崎山頂には見玉尼の墓がある。なお、本絵図に示される「天上」表現は、真宗における表現としては妥当ではなく、一般向けが意識されていると考えられる。

7) これも有名な「本光坊腹籠り血染めの聖教」伝説。現在の吉崎山頂には本光坊の墓もある。

8) 「正須坊宅における名号執筆」という話自体は地元で伝えられたものか。ただし、蓮如が多くの六字名号をしたためて、多くの門徒に渡したという史実があり、また、その地を離れる際に形見の名号としてしたため渡したという伝説は、北陸・東海・畿内など各地に残されている。なお、本絵図に描かれる名号に蓮如名号の特徴はなく、浄土宗・時宗的なものであり、本絵図作成に何らかの背景も窺われる。

9) 蓮如の吉崎退去は、史実としては、同年8月下旬(21日)とされる。もともと蓮如は北陸吉崎に隠遁の形で赴いたのだが、多くの人びとが教えを聞きに吉崎に群集したために、越前国守護朝倉敏景や平泉寺・豊原寺、あるいは真宗高田派等に警戒された。そして加賀国守護富樫氏の内紛に加賀の本願寺門徒も関与したことから巻き込まれ、ついに文明6年には加賀一向一揆が勃発する。蓮如側近の門弟下間安芸蓮崇が策動したといわれ、文明7年吉崎退去の際に、蓮崇は蓮如の船に乗せてもらえなかったという。若狭に上陸した蓮如は丹波路を経て摂津・河内へ入り、畿内へ帰還することになる。

主要参考文献

安藤貞雄(1986)『英語の論理・日本語の論理』大修館書店。

安西徹雄, 他 [編](2005)『翻訳を学ぶ人のために』世界思想社。

小島義郎(1988)『日本語の意味・英語の意味』南雲堂。

斎藤兆史(2003)『日本人に一番合った英語学習法』祥伝社。

斎藤兆史(2007)『日本人と英語』研究社。

柴田徹士・藤井治彦(1985)『英語再入門』南雲堂。

鳥飼玖美子 [監訳](2009)『翻訳学入門(第2版)』みすず書房. (orig. *Introducing Translation Studies: Theories and Applications*, 3rd ed., by Jeremy Munday, Routledge, 2012)

舊跡絵図解説のための参考文献

『蓮如上人と絵伝』(教行社, 1993)

『蓮如上人絵伝の研究』(東本願寺, 1994)

『蓮如上人ものがたり』(青木馨著, 東本願寺, 1995)

『蓮如北陸路を行く』(朝倉喜祐著, 国書刊行会, 1995)

『蓮如伝説を歩く』(和田重厚著, 戎光祥出版, 2003)

『大系真宗史料』伝記編 5「蓮如伝」(法藏館, 2009)

『大系真宗史料』伝記編 6「蓮如絵伝と縁起」(法藏館, 2007)

『蓮如一乱世の民衆とともに歩んだ宗教者一』(神田千里著, 山川出版社, 2012)